

ラオスのこども通信

発行：特定非営利活動法人 ラオスのこども 〒143-0025 東京都大田区南馬込6-29-12, 303 TEL/FAX 03-3755-1603

42号
2008年5月発行



特集 写真に撮ろう！ ワークショップ開催……2

- ラオスの学校保健……4
- ラオス事務所の愛車がピンチ！……5
- 出版プロジェクト……6
- 読書推進プロジェクト……7
- IBBY朝日国際児童図書普及賞受賞！……8
- 国内の活動……9
- おたより/NGOネットワーク……10、11
- 寄付者・協力者のみなさん……12



IBBY朝日国際児童図書普及賞



カメラを渡したときの子どもたちは、好奇心旺盛！

「大切にしているもの」
「笑顔」を
写真に撮ろう！

ラオスの小学校では、板書を暗記する授業が一般的。そうした中であって、図画工作、音楽、舞踊など子ども自らが表現力を養う場としての役割を担っているCCC/CECで、写真家押原譲さんが子ども向け・職員向けに講座を開きました。

特定非営利活動法人ラオスのこどもは、子ども自らが学ぶ力を伸ばしていくために、ラオスで、「絵本、紙芝居などの出版」「図書室」「集い楽しみ学べる場」などの支援を行っています。

「大切にしているもの」「笑顔」を 写真に撮ろう！

子ども向けに写真教室を、そしてCCC/CEC（子ども文化センター／子ども教育開発センター）の職員向けには文書作成の基本トレーニングを2008年2～3月に行いました。

子どもたちは「写真を撮る」ことを体験する中で、表現力とともに自分と対話する力を養いました。

ラオスの小学校では、教科書も一人一冊そろわない環境で、板書を暗記する授業がまだまだ一般的です。そうした中であってCCC/CECは、図画工作、音楽、舞踊など子ども自らが表現力を養う場としての役割を担っています。限られた時間を利用するなら、表現結果が手早く出しやすい「写真」を用いて実験的に「表現」のトレーニングをしてみようと、このたび、写真家でジャーナリストの押原 譲さんが講師となって、いくつかのCCC/CECで子ども向け写真表現ワークショップをおこないました。また同時に、職員向けに画像を活用した書類作成トレーニングもおこないました（JICA NGO技術者派遣）。昨年の試行に続き、今回の子ども向けワークショップは2回目です。

◆ファインダーを通して見つめる子どもたち （ヴィエンチャン・シーサタナークCCC）



子どもたちへのヒアリング

シーサタナークCCCでの一日目（2月9日）。「大切なもの、人に見せたいもの」を撮ろう！と、使いきりのカメラを子どもたちに渡し、使い方などを説明。子どもたちは扱い方をすぐに飲み込み、持ち帰りました。

2週間を空けた二日目（2月23日）、各自が撮影した作品を見せ、講師が撮影者に問います。「どうして、これを撮ったの？」。子どもは「家族だから」「きれいだから」などの答を返します。すると講師は「家族の中で、なぜお母さんを撮ったの？」「き

れいって、どんなところが？」など、掘り下げて質問をぶつけることで、子どもは、自分が何をみつめたのかを自覚していきます。そして子どもに新しいカメラを渡し、同じテーマで撮ってくるように求めました。

3日目（3月2日）、再度撮ったものを巡って問答をします。ある子どもは「これは庭に咲く花。お母さんが一生懸命育てていて、自分も大切に思うし、人にも見てもらいたくて撮った」と話してくれました。この



実験的にパネルにする

子は、自分が何を人に伝えたいのかという表現の基本を学ぶことができたといえるでしょう。

◆「笑顔」がいっぱい （パクセー師範学校附属小学校内）

2月12日、2月15日の2日間実施。テーマは「笑顔」。対象が小学生でしたが、先生方の積極的な協



パネルへの貼り付け作業

力で、子どもたちの飲み込みも早く、出来上がった写真にはいい「笑顔」がたくさん並びました。

◆こちらの意図から離れて自分流？

(ルアンパバンCCC)

2月25日、3月1日の2日間実施。「笑顔」をテーマに、「顔をアップでフレームの真ん中で写す」という説明をしました。しかし、こちらのねらい（個々の表現が集まれば、大きな作品になりうるのでは）とは裏腹に、出来上がった写真は、テーマも撮り方も、各人各様でした。他の2か所のCCCよりも、参加者がやや年齢の高い12歳、13歳であったことで、自分流を楽しんだのかもしれません。



休み時間に写真に殺到する生徒たち



完成したパネルの前で記念撮影

◆人に伝える文章を書けることをめざして

CEC職員として、NGO職員として、活動を、文章を通して支援者に伝えることができるようになり、資金を自分たちで調達できるようになるのが望まれるのはいうまでもありません。しかし、現実には、そうした文章力を持つ人材は限られています。

そこで、当会の事務所とルアンパバンCCCで、職員向けに、自分の活動を、写真と自分で文章を書いて説明するという研修を行いました。パソコンを使い、画像にキャプションを加えて、レポートを作りました。会では、これまで、なかなか、そうした意識を喚起する機会そのものがなく、これを第一弾として今後につなげていくべきものであることがあらためて明らかになりました。



CCC職員に写真の選び方を指導

＜写真教室に参加して＞

- 子どもたちの声
「自分で写真を撮ることができて自信がついた」
「撮った写真についていろいろ聞かれたことで、自分で考えることができた」
- 先生の声
「子どもの撮る写真が、1回目より2回目がよくなっていった」
「考えるということの改善が図られた」
「子どもたちは踊りや絵画とは違う表現を体験できた。しかし、カメラはお金がかかるので日常的に取り入れることは難しい」

健康に過ごし、勉強を続けるために ——ラオスの学校保健

子どもたちが学ぶ環境について、健康面からは、どのような現状があるのでしょうか。
現在、ラオスで学校保健の支援に取り組む田平由希子さんに寄稿いただきました。

●学ぶ環境の改善への取り組み

学校保健と聞くと何を思い浮かべるでしょう。

日本の方からは「保健室の支援ですか」という反応が返ってきます。それは学校保健のほんの一部です。学校保健とは、ラオスでも日本でも子どもたちが肉体的精神的に健康に過ごし、勉強を続けるための環境改善への取り組み全般を指します。



WFP(世界食糧計画)による給食補助

ラオスでは2005年に「学校保健政策・戦略」が策定され、現在まで国・県・郡の教育および保健行政の中に「学校保健タスクフォース」と呼ばれる担当官が任命されています。さらに私の支援するウドムサイ県の学校保健対象校57校には、校長と先生1名からなる学校保健チームがいて、彼らを中心に様々な改善への取り組みが行われています。

例えば、生徒が爪や髪を清潔にしているか、各教室にゴミ箱があるか、トイレがきちんと管理されているか、机・椅子の数は十分か、食物に含まれる栄養や病気に関する基本的な知識があるか、学校に家畜が侵入しないための柵が設置しているか、校内で禁煙が明示されているか、体罰が行われていないか、交通規則を知っているか、地域社会が学校の行事



ユニセフ設置の水タンクを利用

に協力しているかなど、「学校保健戦略」には100以上のチェック項目があります。これらはラオスの小学校の主要教科の一つ「私達の身の回りの世界」(理科、社会、保健を総合したような科目)の内容と深く関連づけられています。

●課題を学校が解決することをめざす

ラオスの、とくに農村部においては、学校に水がない、援助でトイレを作っても生徒が使い方を知らない、非衛生的な水



ポスターコンテスト入賞作品

を飲んでしまう、少数民族の親が迷信から子どもの髪を切らせない、校庭を家畜の放牧用に貸している、援助の駆虫薬を教師が転売した、生徒の喫煙を教師が黙認、基本的な救急法の知識の欠如、添加物の入った菓子類の摂取と増え続けるゴミ、校外売店への衛生指導の難しさ、健康診断制度の未整備、地域と学校、行政の連携の欠如など、学

校を取り巻く状況は非常に厳しいといえます。

これらの問題をまず学校自身に認識してもらい、自ら解決しようとするのを指導・助言というかたちで促し、経過をモニターするのが学校保健タスクフォース(行政官)の役割なのです。

学校保健のもう一つの特徴は、省の枠を超えた協力をめざしていることです。しかし、学校保健はラオスにおいて比較的新しい概念であるため、教育行政と保健行政がどのような役割を果たすべきかはまだ試行錯誤の段階です。ラオスにおいてどのような「学校保健」が適切なのか、今後もしばらく政府による議論と模索が続くことでしょう。

田平 由希子 (JICA 専門家/学校保健)

ヴィエンチャンはバブル？

●刻々と変化するヴィエンチャンの町

2か月におよぶ現地調査のため2008年1月、ラオスに入りました。驚いたのは、刻々と変化するヴィエンチャンの町でした。

昨年1月と4月に来たのですが、その頃よりも道路が舗装され、街頭も増え明るくなりました。夜遅くまでやっているスーパー、コンビニもあり、夜歩いていても以前よりずっと楽しい雰囲気です。インターネット環境も問題なく、あたりまえのように



渋滞のヴィエンチャン市内

メールが打てます。

何よりも驚いたのは、圧倒的に増えた人でした。車やバイクが増えて渋滞も起こるようになったのは何年も前からですが、今回は観光客の

多さです。私の泊まったゲストハウスもたびたび満室、他のゲストハウスもどこも満室状態で、夜遅く着いたバックパッカーたちが宿を求めて通りをうろついている姿をよく見ました。「宿はどのへんで取れるか？」と尋ねられたことも何度かありました。知人がヴィエンチャン経由でバクセーへ行くことになって、日本からホテル手配を試みていたのですが、どこもとれず、結局、

私が泊まっているゲストハウスにお願いして一部屋とってもらったほどです。

●「The New York Times」でラオスが1位に

その彼女がメールで教えてくれたのが、「The New York Times」の「The 53 places to go in 2008」でラオスが1位になった記事でした。ラオスに滞在している日本人は誰も知らず、皆で「本当？（信じられない!）」という感じでした。そういうことも原因なのでしょう、とくに今回は観光客が圧倒的に増えているのを感じました（ルアンパバンでは、この1位をお祝いするお祭りが3月2日に行われました）。

私が初めてラオスに来たのは20年ほど前なのですが、そのころは、車は大通りのサムセンタイ通りですら2、3台見かけるほど。歩いていても人すらめったに会いませんでした。店に入ってもお客は自分たちだけ、人がいるのはタラート（市場）だけでした。夜はあまりに暗く、人もいないので怖い感じで、気候は暖かいけれど心まで寂しくなる雰囲気は、幼い頃、田舎で育った人の中には覚えがあるのではないのでしょうか？お化けが出そうな暗さ、とでも言えばいいのでしょうか。日本への連絡も電報を送るのに何時間もかかりました。

今回、夕食時のレストランでよくお会いした開発援助関係の方が、中国や日本の企業の進出も圧倒的に増えているのだとかで、「今はバブルだ～」と言っていたのをよく覚えています。確かに、このヴィエンチャンの様子はバブルなのかもしれません。
(小沼 千秋/理事)

取り残される山がちの地域

——ラオス事務所のたった1台の愛車がピンチ！——

ヴィエンチャンの街はきれいに、派手になりました。しかし、教育環境の改善はなかなか進まず、地方にあっては取り残されていく状況があります。

ラオス事務所では、図書を子どもたちに届けるため、社団法人中部建設協会から2001年にご支援で頂いた（もともとは河川パトロール車）、ただ一台の車を1日に何百キロも悪路を走らせてきました。そんな頼りの愛車が、昨年調子が悪くなってしまいま



た。点検・修理に出しても、ラオスではきちんと直してもらうのは難しく、修理に出してはまたすぐに調子が悪くなって、また修理に出す、そんなことを繰り返すうちに、ついに会の車では遠くへの出張はできなくなってしまいました。

山がちのラオスで、配付に、現地視察に、小回りの利く活動が不可欠です。車のご支援を、どなたかお願い出来ませんか！

出版プロジェクト

◇『子ども文化センター(CCC)活動ハンドブック』

作：ドアンドゥアン・ブンニャヴォン他4名
写真：ナムエイティップ・スワンナヴォン、ALC

103頁、1,200部（日本国際協力財団200部、立正佼成会平和基金1,000部）

当会がCCC活動を初めて14年。CCCの使命・役割の共有をめざして作成。創造的思考や読む・書く・表現する活動の推進、芸術・表現活動の指導など、学校でも活用できる内容。



◇『人生と希望』

作：エヤムパー・ドーンソーン他9名
112頁、6,000部（庭野平和財団）



◇『追憶』

作：ダオペット・ブンマルード他8名
92頁、6,000部（庭野平和財団）
若手作家発掘育成のための「創作文学コンクール」(06～07年当会実施)の入賞作品集。



◇『おもしろい詩』

作：ファンアルン・デンヴィライ
絵：サイサローン・ペッドワンカム
88頁、5,000部（JICA 草の根技術協力事業3,000部、当会2,000部）
詩は読めない、分からない、難しい・・・

と感じている人たちに読んで欲しいとラオスの作家、ファンアルン氏が簡単な言葉で書き下ろした詩集。たくさん子ども、大人に読んでもらいたい。ポップなイラストは、当会新人スタッフの友人が描いたもの。



◇紙芝居『トム君はどこ?』

作：スナンター・カンラニヤ
絵：センスリー・カッティニヤサック
2,000部（学習院女子大学）
歯みがきが嫌いなトムくん。トムくんの歯たちは、まったくみがいてもらえないので、トムくんが寝ている間に、逃げ出した。驚いたトムくんは、これからはみがくから帰ってきてとお願いし、歯みがきをするようになったというお話。教材としても活用できる。



若手ボランティアが活躍！

サイヤブリ県の2つの小規模CCC(子ども文化センター)訪問記

サイヤブリ県では、県の中心部にあるパクライCCCとともに、遠隔地のゲンタオとポーテンでCCC活動が行われています。これらは小規模ながら、若手ボランティアが活躍し、子どもたちも生き生きと活動を楽しんでいます。

●ゲンタオCCC

図書館の横に立つ高床式建物と、その広い庭がゲンタオ



CCCの活動場所です。建物の脇では、手作り紙芝居にした「大きなかぶ」や「サカナちゃんのお留守番」の実演が、建物の中では、ビニールひもを使った花づくり、パーシーの飾りづくり、絵を描くなど、各自思い思いの活動が行われていました。それらが一段落すると、庭を使って子どもたち全員でゲーム。ボランティアの中高生の活躍ぶりが印象的でした。

CCCの活動場所です。建物の脇では、手作り紙芝居にした「大きなかぶ」や「サカナちゃんのお留守番」の実演が、建物の中では、ビニールひもを使った花づくり、パーシーの飾りづくり、絵を描くなど、各自思い思いの活動が行われていました。それらが一段落すると、庭を使って子どもたち全員でゲーム。ボランティアの中高生の活躍ぶりが印象的でした。

●ポーテンCCC



小学校に併設され、学校図書室(HA)と一体となって活動が行われています。CCCのスタッフとともに元CCC館長、教育局職員など、多様な人々の協力があります。スタッフの読み聞かせ、若手ボランティアによる紙芝居の実演、当会スタッフによる大きなかぶの読み聞かせの後、庭で読書推進活動の音楽CDをかけながら、歌・踊りを行いました。陽が照って暑くなっても子どもたちは止まらず、とても楽しんでいました。

読み聞かせ、若手ボランティアによる紙芝居の実演、当会スタッフによる大きなかぶの読み聞かせの後、庭で読書推進活動の音楽CDをかけながら、歌・踊りを行いました。陽が照って暑くなっても子どもたちは止まらず、とても楽しんでいました。

読書推進プロジェクト

学校図書室(ハックアーン)の開設をご紹介

●本との出会いはいつもドラマチック

「朝からずっと準備して待っていたのよ」そんな言葉とともに迎えてくれる学校の先生方。到着時間は連絡した通りなのに、どこに行ってもこう言われるのは、遠路はるばる来た私たちへの歓迎の表われなのでしょう。

その日も教室にはたくさんの子どもと村人たちが待っていて、興味津々で私たちの動きを見守ります。

ヴィエンチャンから運んできた図書の詰まった段ボール箱を教室へ。約500冊が寄贈され、正面の机に今日の主役の本を並べます。

子どもたちに、会のスタッフが絵本の読み聞かせを始めると、初めての絵本、初めて聞くお話に、緊張気味だった子どもたちがどんどん惹きつけられていきます。そんな様子に興味を示し、なかには子ども以上に真剣に紙芝居を見つめる大人たち。

本と人々との出会いの場、図書室開設は、おかげさまで174か所になりました。

●全校挙げて図書室を待ちうけて

「図書室を開設してほしい」、何度も申請をしてきていた中学校は、1500人を超える生徒を抱えながら、それまでは数十冊の図書があるだけで、それらの本もよく読まれてボロボロの状態でした。小学校に比べて支援の機会が少ないのが中学や高校です。校長先生は図書室のための教室を一つ空け、その教室で勉強していた生徒は、近くの小学校を借りて授業を受けられるようにして、学校全体で当会の支援を待ったのです。2008年、支援が実現しました。



HA163 ワットルアン小学校(アタプー県)での図書室開設式
三井住友銀行ボランティア基金ご支援

<2007年度開設の学校図書室と ご支援いただいた方々>

- HA162 バーンサイ小学校
三井住友銀行ボランティア基金
- HA163 ワットルアン小学校
三井住友銀行ボランティア基金
- HA164 トンナミー小学校
北大和小学校・ベルマーク教育助成財団
- HA165 チェンヴィライ小学校
Lao-Japan Airport Terminal Service (L-JATS)
- HA166 カムクード郡民族学校
リコー社会貢献クラブ・FreeWill
- HA167 ノンニヤーン小学校
東典子
- HA168 ブンケオ小学校
豊府小学校・清泉女学院中高等学校・
西条南中学校・稔台小学校・高木瀬小学校・
ベルマーク教育助成財団
- HA169 スックマー小学校
キヤノン株式会社
- HA170 ポントーン小学校
早川要清・和田慎二
- HA171 ドンハイ小学校
富士ゼロックス端数倶楽部
- HA172 ノーンコーン小学校
福岡那の香ライオンズクラブ
- HA173 ノンペット中学校
F O R D FOUNDATION
- HA174 ポンガーン南小学校
山本晴代

みなさま、ご支援ありがとうございました

※ HA は学校図書室 HakArn(ハクアーン・ラオス語で
愛読の意味。学校図書室の愛称)の略です。

数字は通し番号。

ご支援者の敬称は略させていただきました。

皆さん、ご支援ありがとうございました！ IBBY朝日国際児童図書普及賞を受賞！

4月、ピーマイ前に会にとつて、大変おめでたいニュースが飛び込んできました。IBBY朝日国際児童図書普及賞の受賞のお知らせです。

IBBYとは、子どもと子どもの本に関わるすべての人をつなぐ世界的ネットワークとして、スイスのバーゼルに本部を置く国際児童図書評議会（International Board on Books for Young People）です。1953年に設立し、世界60カ国以上に支部があり、世界中や発展途上国において、すぐれた子どもの本の出版や普及を奨励。子どもと子どもの本に関わる人々を支援し、その能力を高める機会を提供すること、児童文学関連の学術研究、調査活動など、子どもの権利条約（Convention on the Rights of the Child）の基本に則って活動している団体です（IBBYのHPより）。

IBBY朝日国際児童図書普及賞は、1986年に創設。朝日新聞社とIBBYとの協力関係のもと、世界中で子どもの読書を推進している活動のうち、際だった、独創的なものをたたえる賞です。

昨年の春頃に、IBBY日本国際児童図書評議会から、当会を推薦したいという連絡をいただき、5月末に津田塾大学の早川敦子先生とゼミの皆さん、当会ボランティアの力を借りて英文翻訳を行い、申請書を提出していました。

突然の受賞との知らせに、事務局一同、大喜びです。授賞式は、今年9月にデンマークのコペンハーゲンにておこなわれます。

野口朝夫事務局長は、「25年の活動の積み重ねが、少しずつ成果として姿が見えるようになってきていましたので、タイミング良い、外部からの評価で、とてもうれしく思います。とりわけ、海外で評価されたこと、気持ちが良いですね。今後とも、より一層活動の質の向上を図っていこうと思いますので、くれぐれもよろしくご支援をお願いいたします」と喜びいっぱいのコメントでした。これまでの多くの皆さんのお力添え、ありがとうございました。

インターンシップ

1年間を振り返って

インターンとして、2007年3月から1年間、東京事務所を助けてくれた工藤侑子さんと山崎麻友美さん。大学生の二人にとって、NGOの事務所とはどうだったのでしょうか。

□インターンのきっかけは？

工藤：昨年2月に発展途上国研修でラオスに行ったことから。学生の間にいろいろなことをしたいという思いが、強くなりました。NGOってどういうことをやっているのだろうという興味がありました。

山崎：経緯は工藤さんと同じで、せっかくラオスに行ったので、この時期だけラオスとつながっているのではなく、インターンをしたら、そのままラオスとつながっていられるかと思ったからです。

□イベントの運営補助や事務作業など、インターンを振り返ってどうですか？

工藤：学生以外の、いろいろな年代のボランティアの方に会える機会が多かったことは楽しい。大変なことは、同じ学生に対して、ボランティアを誘うこと。興味があっても、時間がないのか、誘いにのってもらにくい。ボランティアは、自分からやることであって、人から言われてやるわけではないと思うけど、来てくれると「ありがとう」の気持ちに。ラオスを知らない人を誘うのは難しい。

山崎：自分が自立していなければ、ボランティアなど、人に何かをすることは出来ないと思いました。イベント手伝いが必要なので、友人に頼むと、アルバイトや試験と、他のことで来られないことがある。ボランティアをしないから関心がないということでない。事務局にいて、業務が身近になって、スタッフが忙しいのを見て、役に立つと思うと嬉しかった。

工藤：インターンを経験したことで、以前よりも視野が広がりました。これから小さな事でも携わっていきたいです。

山崎：NGOに限らず、ちょっとした手助けが必要な時は助けること。その気持ちはここで学びました。

□工藤さん、山崎さん一年間お疲れ様でした！



工藤さん(右) Walイベントにて



山崎さん、麻布イベントにて

国内の活動

2007年11月～2008年3月

キッコーマンでの絵本貼りイベントに参加しました！

今年で4年目となるキッコーマン(株)のラオス語絵本貼りイベント。3月14日(金)に千葉県野田市のキッコーマン「もの知りしょうゆ館」にて近藤知子、小沼千秋、両理事が参加、翌週の18日(火)には仙台にある同社東北支社での絵本貼りイベントに、近藤が参加してきました。

もの知りしょうゆ館はキッコーマン野田工場内にある見学施設。会場内にはそこはかとなくしょうゆの香りが漂っています。当日は雨の中、工場や近くの事業所から18人が参加してくださいました。ラオスの国と教育事情、会の活動を画像などで紹介した後、皆さんラオス語絵本貼りに挑戦しました。ラオスのバナナチップとタマリンドキャンディをつまみながら、各人1冊を手
に、皆さんわいわいと・・・と思ったら、真剣に紙を切って、絵本に貼って、と仕事のような雰囲気。それにしても皆さんのラオス文字、なかなか上手でした。

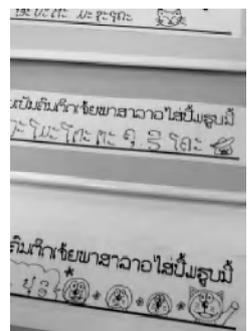


当日は、しょうゆ館内の「まめカフェ」での豚汁とソフトクリームにラオスコffee付き♪ 絵本貼りを終わった皆さんは、くつろぎながら絵本の話などに花を咲かせていました。

もの知りしょうゆ館ではしょうゆの基礎知識や製造工程が楽しく学べるということで、今度は見学で行ってみたい所です。どなたにも開放されていますので(要予約)、皆さんも行ってみては？

仙台支社では16名と、多くの皆さんが参加し、支社あげてのイベントとなりました。プログラムは野田地区と同じく、ラオスの国会の活動紹介の後、絵本貼りに挑戦。皆さん顔見知りということで、あちこちで会話が盛り上がりながらも手は休まず、全員1冊ずつの絵本を仕上げました。見慣れないラオス語に「あ、どちらが上でしたっけ!?」「こんな難しい文字を1年生で習うんですね！」と驚きながらも、こちらの皆さんもサインはなかなか筆達でした。

皆さんの善意がいっぱい詰まった本は、1か月ほどでラオスの子どもたちの手元に届く予定です。



運営会議

今年最初の運営会議が1月13日に、ライフコミュニティ西馬込(東京都大田区)で行われました。計17人が参加。今回の内容は、帰国中の猿田駐在員からの現場の声やインターン学生の感想、今後の運営会議の向上についてでした。

ボランティアやスタッフそれぞれの立場から一人ひとりが活動の向上や、運営会議そのものについての意見を述べました。人によって、運営会議で得たいものは異なります。今後の活動が前進し、皆さんの声をよりカタチにしていく運営会議にしていきたいと思えます。



イベント

●ワールド・カルチャー・フェスティバル08
1/25 キッコーマンKCCホール

主催：キッコーマン、花王、アサヒビール
企業社員を対象にしたイベントで、当会と若い難民を考える会、日本国際交流センター、ハンガーフリーワールドが参加。当日は各NGOが関わる国の料理を提供したり、民族衣装を着用してもらったりと、社員の皆さんに国際協力を身近に感じてもらいました。

当会ご自慢のゲーンペツ(筍と鶏肉レッドカレー)は今年も大好評。また、民族衣装は、モン族とアカ(イコー)族の衣装を紹介。ラオスの鮮やかな柄は、みなさんの目を奪っていました。

ラオス語絵本プロジェクト

●富士ゼロックス端数倶楽部
2/23 六本木ハークスビル



社員14名が参加。90冊の絵本にラオス語翻訳を貼りました。同倶楽部は毎年絵本貼りイベントを実施し、絵本を送っています。07年度はヴィエンチャン都に図書室も開設。この日はラオスの教育事情等を説明し、ラオスを身近に感じてもらいました。

おたより コーナー

2007年11月22日、埼玉県戸田市芦原小学校6年生5人が、社会科見学として東京事務所を訪れました。事前学習も含めて、熱心に会の活動やラオスのことを調べ、学校に戻ってからは発表会を行ったとのこと。日本の子どもたちも世界やラオスに目を向けている姿が頼もしいです。子ども達から届いたお便りをご紹介します。

訪問学習では、生徒たちからは、次のような質問が飛び出してきました。

- ◇ラオスで一番人気の料理は何？
- ◇ラオスにだけ援助しているのはなぜ？
- ◇産業が発達していないラオスで、どのように電力を起している？
- ◇5年間しか学校に通わないけど、6年生の勉強はするの？
- ◇ラオスに日本語の本を送る場合はどうするの？
などです。

【子ども達の感想】

■学校について…

ラオスの学校には駄菓子屋があると知って驚きました。僕は少し羨ましいと思いました。ラオスの学校は制服です。いろいろな工夫があつてすごいなと思います。

■私たちにできること…

私たちがしなければならないのは、世界の様々な情

報に関心を持つこと。絶えずアンテナを張ることで、自分が次にやらなければならないことが必ず見えてくると思います。

■知ったこと…

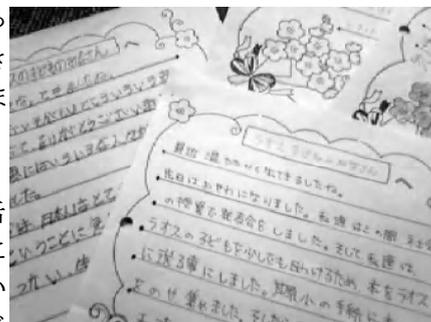
日本では当たり前に行っていることが出来ない人が世界にはたくさんいるということ。日本は全ての人が9年間教育を受けることが出来て、とてもめぐまれていると思います。

■市場について…

一番びっくりしたことは、ラオスではニワトリを売っています。市場に行くと生きているニワトリが売っています。

■ありがとう…

教えてもらったことを活かして、募金活動やリストに載っている本の回収をしています。ラオスの人達に本が届くといいなと思います。



子ども達から届いたお便り

ラオス料理を作ってみましょう ～ナムワーン～



甘いココナツミルクが、タピオカやバナナ、小豆などと溶け合って、日本人の口にもよく合うラオスの代表的なデザート。

一度食べたらやみつきになる人も多いはず。「ラオス風あんみつ」として知られているナムワーンは、氷を入れて冷たくしたり、温めて作ったりと、家庭で気軽に作れる一品。季節やお好みによって、サツマイモやコーン、カボチャを入れても美味しいです。

■材料 (4～5人前)

タピオカ：大きじ4、カボチャ：1/4個、ココナツミルク：1/2カップ、砂糖：100g、塩：少々、水：2カップ

■作り方

- 1) タピオカは30分ほど水につけておく。
- 2) 鍋に水2カップを入れて沸かし、水気をきったタピオカを加えて透き通るまで煮る。
- 3) カボチャは2cm角に切る。
- 4) 2) にカボチャを加える。
- 5) ココナツミルクを加えてから、くずれない程度に柔らかく煮る。
- 6) 砂糖、塩を入れて、ひと煮立ちすればでき上がり。
※バナナを加える時は、くずれやすいので煮すぎないこと

事務局より

2007年11月～2008年2月

<ラオス事務所の動き>

11月

- 11/6 Japan NGO Meeting(JANM)出席
- 11/8 HA170 開設<サイヤブリ県>
サイヤブリ県ゲンタオ CCC を訪問
- 11/10 サイヤブリ県ポーテンCCCを訪問
- 11/11 サイヤブリ県パクライCCCを訪問
- 11/19-20 ボーケオ県モニタリング調査
- 11/21-23 読書推進セミナー (フォローアップ) <ボーケオ県>
- 11/28-29 JICA 草の根技術協力事業視察団受入

12月

- 12/6 Japan NGO Meeting(JANM)出席
- 12/6-7 HA162-163 開設<アッタプー県>
- 12/10-11 セコーン県モニタリング調査
- 12/12-14 読書推進セミナー (フォローアップ) <セコーン県>
- 12/24-25 HA171 開設<ヴィエンチャン都>
- 12/25-1/21 猿田一時帰国

1月

- 1/10-3/9 理事小沼、来ラオス
- 1/25 Japan NGO Meeting(JANM)出席 (猿田)
- 1/26 ボリカムサイ県ターパバットCCC、ボリカムサイCCCを訪問

2月

- 2/2-3 子どもブックフェスティバルに参加<サイヤブリ県>
- 2/5-3/4 写真家押原謙氏、来ラオス
- 2/6,11 学習院女子大学ツアー訪問受入
- 2/9 写真ワークショップの実施@シーサタナークCCC
- 2/11-12 チャムパサック県モニタリング調査
- 2/13-15 読書推進セミナー (フォローアップ) <チャムパサック県>
- 2/17-19 HA167-169 開設<チャムパサック県>
- 2/20-21 図書箱配付<サワナケート県、カムワン県>
- 2/28-29 HA172 開設<ヴィエンチャン県>

※HA=ハックアーン(学校図書室) CCC=子ども文化センター

<東京事務所の動き>

11月

- 11/3 JNNE ライフスキル教育実践ワークショップ(森・関)
- 11/5 コープかながわ活動イベント (赤井)
- 11/8-9 JICAでNGO人材育成研修 (小沼・関)
- 11/11 理事会、運営会議
- 11/17 ラオスのこども25周年の集い
- 11/22 埼玉県戸田市立芦原小6年生が事務所訪問
- 11/27-30 FASID 研修 (赤井)

12月

- 12/4 ユニセフ神奈川報告会 (赤井)
- 12/6 学習院女子大学で活動説明 (関)
- 12/9 理事会、運営会議
- 12/30-1/5 年末年始休業

1月

- 1/13 理事会、運営会議
- 1/15-25 大田区NPO区民活動展
- 1/25 第6回ワールドカルチャーフェスティバルに参加 (赤井・関)

2月

- 2/7 田園調布雙葉学園・絵本づくり体験授業 (赤井)
- 2/10 理事会、運営会議
- 2/23 富士ゼロックスにてラオス語絵本づくり (関)



NGOネットワーク ～生きる力につながる読書推進活動～

学校が子どもたちに対して行うべき教育とは、読み書き計算や知識の習得にとどまってよいわけではありません。例えば、保健衛生の教育は知識が行動変容につながってはじめて意味のあるものとなります。人から喫煙を勧められても適切に断るには、自分で判断する力や対人能力など、様々な能力が必要です。このように、より

よく生きるために必要となる能力(技能)をWHO(世界保健機関)やユニセフなどの国際機関ではライフスキルと呼び、学校教育に欠かせないものと位置づけています。



ラオスのこどもが加わっているJNNE(教育協力NGOネットワーク)では、文部科学省の事業として「ライフスキル教育プロジェクト・マニュアル」をこのほどまとめました。「読書推進活動編」と「エイズ教育編」からなり、どちらも100ページに及び、実践を踏まえた充実したものができあがりました。

読書推進活動は、これまで識字と結びつけて考えられてきましたが、問題解決、意思決定、批判的思考、創造的思考、コミュニケーション、自己認識、共感、ストレスと感情への対処など、ライフスキルの教育でもあるとの理解を、私たちはあらためてするに至りました。英語版も作成しており、教育協力に携わる人々に読んでいただくことをめざしています。

(森透)